戦国時代の覇者毛利元就（後編）

これより毛利氏が中国地方の覇者になる道を記します。

大内氏当主の義隆（よしたか）はかねて重臣から戦国大名の当主としての意気込みのなさを失望されていましたが、筆頭家老の陶（すえ）　隆房（たかふさ）を排斥しようとします。それに反発して隆房は挙兵して義隆を誅殺します。天文２０年（１５５１）のことです。

隆房は後には豊後の大友氏に嫁いた義隆の姉の子晴英（はるひで）（義長）を据えました。陶　晴賢（はるかた）（謀殺後隆房より変名）の傀儡（かいらい）政権です。

晴賢は主な重臣と大友氏更に毛利氏にも事前に了承を得ていたのです。

ただ関係者は晴賢が主人の義隆をおろしても殺すまではしないと思っていたかもしれません。

義隆は事前の策謀に気づかなかったのか、あり得ないと思ったのでしょうか、九州にも逃げられず殺されます。

毛利元就（もうりもとなり）は新大内政権（陶晴賢傀儡）に臣従しました。

その後も尼子氏の出雲から安芸、備後への南下攻勢があります。味方の国人領主は大内氏の傘下としてではなく元就の傘下又家臣の意識で戦います。

毛利氏の家臣団構成は安芸・備後の大内氏傘下国人領主を包摂していきます。

元就は西条盆地（東広島市）の領地支配のことで陶　晴賢ともめます。

元就は大内―陶氏体制から独立の戦国大名の地位をつかもうとします。

陶　晴賢に戦いを挑みます。

天文２３年（１５５４）陶氏支配の安芸国の西部、厳島を占領します。

翌年の弘治元年（１５５５）春には厳島に宮ノ城を築き兵を入れます。

晴賢は石見国の吉井氏の反乱で安芸への出陣が遅れます。

弘治元年秋、厳島で毛利軍と陶軍（新大内）は激突します。厳島の争奪戦です。

結論的には毛利軍が大勝利で、陶晴賢は厳島で自刃して果てます。

毛利氏の水軍である川の内警護衆、小早川警護衆、因島・能島・来島の村上水軍が陶（大内）の水軍を圧倒したからです。船同士の戦いよりも大量の兵員を島にどう運ぶかです。

島の中での戦闘になり、奇襲作戦等の作戦で毛利軍は大勝利です。晴賢は海上を毛利水軍に押さえられ、島から逃げる船がなく自刃したのです。

なぜ大軍どうしがこの狭い場所で雌雄を決しなければならないのか分からないところがあります。

厳島神社は平清盛の篤い信仰で平家の守護神となった神社です。以降中央政権も地方の覇権者も大事にして来ました。

ここでの決戦の理由は、厳島はこれまで大内軍が西方（安芸、備後、出雲、京）に進軍する時の出陣拠点して来たことが挙げられています。

外に瀬戸内海の物流の基地としての商業上の重要拠点であることを挙げられています。

しかし当時も陶軍の中で、あんな狭い島で戦いを行うと兵員の数がまさっていても、思いがけない奇襲でやられることがあることを想定して反対した幹部武将もいました。

晴賢は水軍も兵員も自軍が優勢と判断し、厳島での決戦に踏み切りました。

又、元就は平地では兵員の数が多い陶軍には勝てないと考え、厳島へ晴賢を誘導したとの説もあります。

とにもかくにも陶軍（大内）は大敗北です。

元就は安芸、備後両国を直に支配する領主になりました。

元就は初めて独立の戦国大名になったのです。

弘治元年（１５５５）ことです。元就は５９歳になっていました。

京では１３代将軍足利義輝の時代で、近畿は三好長慶が支配し、織田信長は尾張国一国を支配する戦国大名になったころです。信長は２２歳です。

武田信玄は甲斐、上杉謙信は越後の戦国大名で信濃の川中島で戦っていたころです。

東海では今川氏、関東では北条氏が有力戦国大名です。

陶氏は滅びましたが、大内氏（義長）は存続していました。元就は２年後の弘治３年（１５５７）に攻め、義長自刃させ、大内氏は完全に滅亡しました。

元就は周防、長門、石見半国も手に入れました。
大内氏の領土の九州北部の豊前、筑前は大友氏と取引し引き継ぎません。
大内義長が実家の大友氏に戻れなかったのはこの元就と大友氏の裏取引によるものです。大友氏当主は義長の異母兄です。
戦国時代は厳しいですね。落ち目になったら兄も敵につきます。
これで元就は安芸、備後、周防、長門、石見半国の大大名に一挙に成り上りました。

元就は今後の家族の結束を３人の息子に教訓します。
長男隆元は既に天文 15 年（１５４６）に家督を継いでいますが、実権は元就にあります。
次男元春は吉川氏へ養子、三男隆景は小早川氏へ養子。
三子へ三兄弟協力が必要なことを強調します。
「本家の毛利が堅固でなければ吉川、小早川も成り立たない。当家に良かれと思う者は他国のことは申すまでもなく、当国（安芸、備後）にも一人もいない」
毛利（もうり）・両川（りょうせん）（吉川、小早川の川）の協力体制の必要を言っています。
これを元就の遺訓状と言っています。
元就は相続争いで弟を殺しています。これを悔いていたと言われています。

元就は出雲の尼子攻めを図ります。
尼子本家晴久は天文２３年（１５５４）に身内の最大勢力で新宮党と言われる尼子庶家と闘争し、勝つのですがこれで勢力をそがれます。
永禄４年（１５６１）当主晴久は４１歳で病没します。後は１２歳の義久が当主です。
尼子氏の弱体化は否めません。
元就は永禄５年より尼子への攻勢を進め、時間をかけながら永禄９年（１５６６）に尼子氏本城の富田城（とんだじょう）を開城させ当主と兄弟二人を引き取ります。
この間に毛利嫡男隆元（当主）が永禄６年に病没します（４２歳)。
家督は子の１１歳の輝元（てるもと）です。元就が後見します。
永禄１０年には伊予（四国愛媛県）へ遠征し、河野氏を傘下にします。

永禄３年（１５６０）織田信長は桶狭間で今川義元を討ち、永禄１１年（１５６８）に１５代将軍義明と共に上洛します。尾張、岐阜、近江、近畿を抑えます。信長時代への開幕です。

永禄１２年、尼子の残党山中鹿之助が尼子勝久（本家でなく新宮党系）を担ぎ、立ち上がります。これに対処しなければなりません。
元就は九州の大友氏への対応、尼子残党への対応で、織田信長との連携を探ります。
その中で元亀２年（１５７０）６月１４日、７５歳で病没します。
支配した領地は安芸、備後、周防、長門、出雲、石見、伯耆の半国、備中の半国でほぼ中国地方を制覇していました。

この年９月に信長は延暦寺を焼き討ちしています。
武田信玄（甲斐、信濃、駿河)、上杉謙信（越後、越中)、北条氏康―氏政（関東)、朝倉義景（越前）も健在で信長も、未だ天下への道の途上でした。
死の前に次男元春へ「５～１０年間に領土を手に入れたのは時の幸運、天下を競望するようなことはあってはならない」との遺言。

元就の死後は当主輝元を支える執政は元春（次男　吉川氏)、隆景（三男、小早川氏)、福原貞俊（元就生母の実家)、口羽通良（毛利庶家）の御四人体制となります。

しかし毛利氏は信長に反発する１５代義昭将軍を味方し、大坂本願寺と連携し織田信長対抗し、結果豊臣秀吉に敗れます。
豊臣時代は秀吉に臣従しお家を保ちます。
その後元春が没し（１５８６年)、隆景も没した（１５９７年）後の関ケ原の合戦（１６００年）では徳川家康に対抗して敗戦し周防、長門の２国になります。
江戸時代通じて残り、幕末を迎えます。
本城を吉田の郡山城から広島城（広島市）に移すのは輝元時代で元就死没後の天正１９年（１５９１）です。
関ケ原合戦の敗戦で居城を家康によって長門国の萩に移されます。

それでは「三本の矢」（三矢（さんし）の訓（おし）え）についてです。
３人の子（隆元、元春、隆景）を呼んで訓えます。
「子の一人に一本の矢を与え折れと、折れました。次いで三本わたし束ねて折れと、折れません。元就より、一本では折れるが三本を束ねると折れない。３人結束して毛利家を守って欲しい」。
この話は元就遺訓状にはありません。
江戸時代に作られた話とされています。
映画やテレビのドラマではいつも出てくるシーンです。

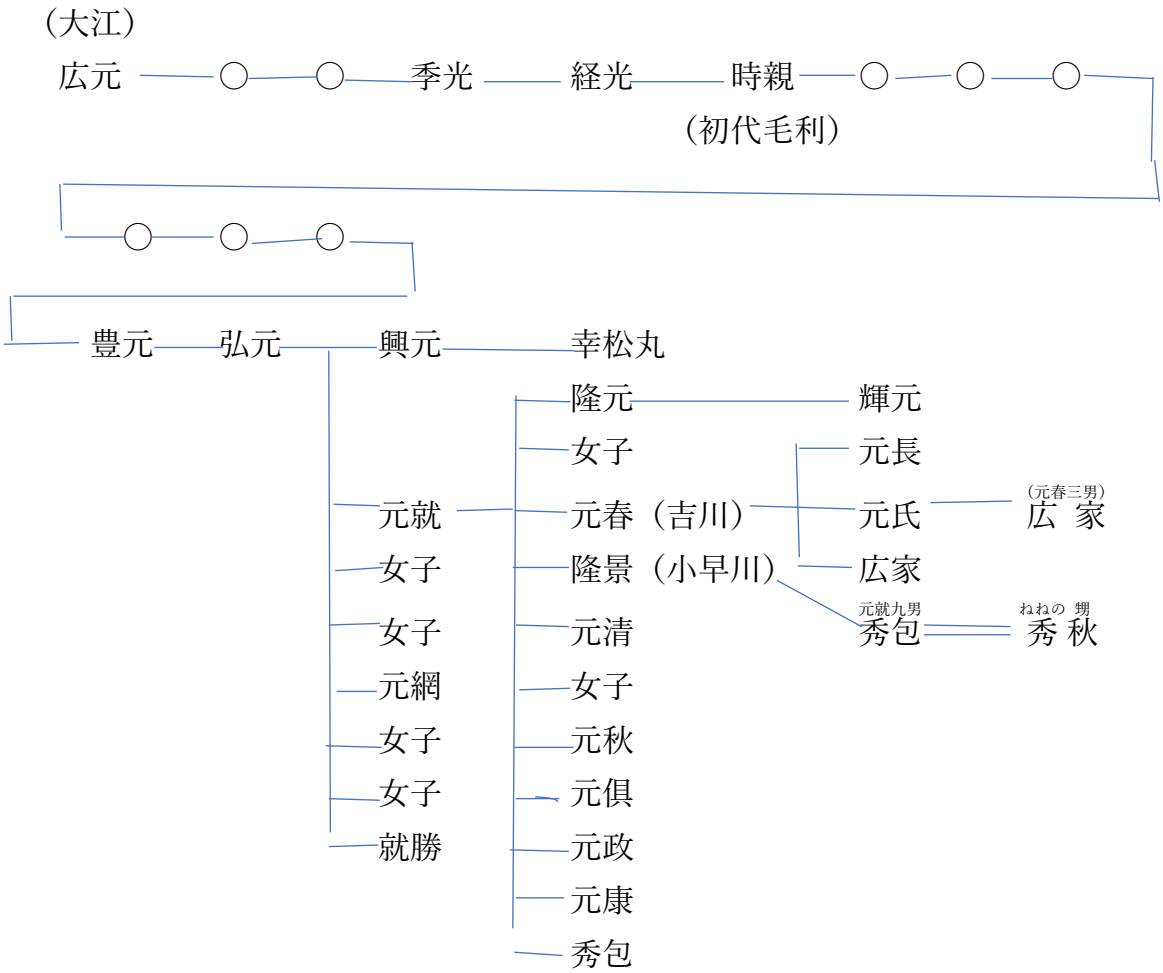
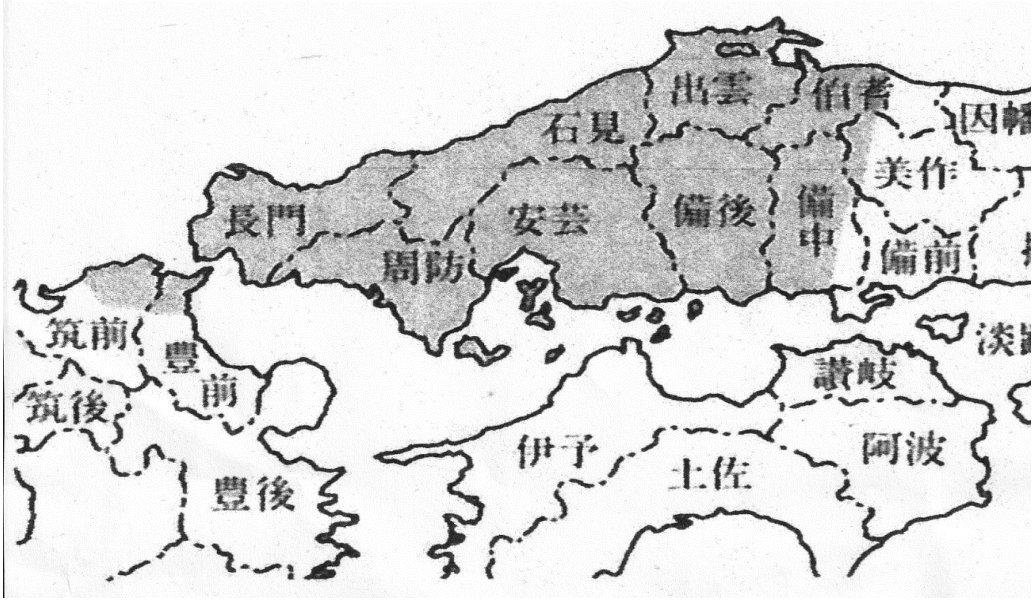
元就は調略を用いることで謀将といわれます。本人も調略の大事を言っています。調略とは敵をだましたり、敵が内部分裂するように画策したり、敵を味方に誘い込む方策ですが、こんなことはどの戦国大名も武将もやることです。
元就が大大名になった一番はかれが戦に強かったからです。強い武将の下に他の武将や侍は集まり、そして家臣になっていくのです。
織田信長も豊臣秀吉も、徳川家康も同じです。戦で強いことが戦国時代に生き残り、天下を制することができるのです。
もちろん全戦全勝ではありません。
勝ち方負け方が大事です。
負けるときは完敗はいけません。逃げる余裕が必要ですし、追い詰められ前に和議が必要です。完敗自刃では破滅でお家断絶です。
勝った時は相手を絶滅に追い込むか、和議で領地を拡大するか、いったんは逃がし後日を期すか、又味方にして家臣にするかの判断が必要です。
ここが戦国大名にとって大事なところです。
毛利元就は武田信玄、上杉謙信、織田信長の前に現れた天下を取り得た戦国大名と言えるでしょう。しかし年齢的に彼らより一代上です。
対抗するには息子の世代となりますが、信長軍団（豊臣秀吉、徳川家康）にはかないませんでした。

以上

２０２３年9月１３日

梅　一声

「毛利氏略系図」


（大江）
広元
季光
経光
時親
（初代毛利）
豊元
弘元
興元
幸松丸
元就
女子
女子
元網
女子
女子
就勝
隆元
輝元
女子
元長
元春（吉川）
元氏
（元春三男）
広 家
隆景（小早川）
広家
元清
元就九男
秀包
ねねの 甥
秀 秋
女子
元秋
元倶
元政
元康
秀包

戦国時代毛利氏最大支配地域